

10月 25日 (日) 歴代上 22章	「今こそ、心と魂を傾けてあなたたちの神、主を求め、神なる主の聖所の建築に立ち上がれ」(19節)。ダビデは主の神殿を築くことを願った。しかし、彼が大きな戦争を行い、多くの血を流したことによりとその願いは退けられ、その子ソロモンが神殿を建てる者とされた。それでもダビデは建築の準備を整え、主の神殿が建て上げられることを願う信仰に立ち続けた。
26日 (月) 歴代上 23章	「ダビデは言った。『イスラエルの神、主はその民に安らぎを与え、とこしえにエルサレムにお住まいになる。レビ人はもはや幕屋とその奉仕に用いるすべての祭具を担ぐ必要がない』」(25・26節)。ダビデは、その子らとイスラエルの民の信仰を信じてこう語った。しかし、主の祭具を担ぐ重さを忘れた祭司たちはその務めの責任の重さも忘れていったのだろう。
27日 (火) 歴代上 24章	「ダビデは、エルアザルの子らの一人ツアドクとイタマルの子らの一人アヒメレクと共に、それぞれ任命されている奉仕に従って、アロンの子らを組に分けた」(3節)。全イスラエルを支配する者となったダビデだが、祭司を任命するために、ツアドクとアヒメレクと共に、奉仕の組み分けを行った。組織は信頼する人々と共に作ることの大切さを知っているからだろう。
28日 (水) 歴代上 25章	「彼らは年少者も年長者も、熟練した者も初心者も区別なく、くじによって務めの順番を決めた」(8節)。奏楽や歌で神殿で奉仕するヘマンの子どもたちは、皆訓練を受けたものだったが、彼らは年齢や習熟の度合いによって区別されることなく組み分けがなされた。賛美の奉仕は、技術ではなく、心から神を崇め、喜びを表わすことこそ、その務めだったから。

29日 (木) 歴代上 26章	「先見者サムエル、キシユの子サウル、ネルの子アブネル、ツェルヤの子ヨアブなどが聖別したすべての品物もシェロミトとその兄弟たちの手にゆだねられた」(28節)。イスラエルの人々は、誰の手により献げられたものであっても、主に献げられた品々を聖別した。かつて敵対し殺し合ったアブネルとヨアブの二人の將軍の献げものも、聖別されて受け入れられた。
30日 (金) 歴代上 27章	「ダビデの伯父ヨナタンは顧問となった。彼は英知の人で、書記官として勤めた。ハクモニの子エヒエルは王子の養育係りとなった。アヒトフェルも王の顧問、アルキ人フシャイは王の友人であった」(32・33節)。主に選ばれた王であったダビデ、彼が秀でた王であれたのは、彼を支える人々が与えられたから。教会もそれぞれの賜物を活かし合う互いでありたい。
31日 (土) 歴代上 28章	「わが子ソロモンよ、この父の神を認め、全き心と喜びの魂をもってその神に仕えよ。主はすべての心を探り、すべての考えの奥底まで見抜かれるからである。もし主を求めるなら、主はあなたに御自分を現わしてくださる」(9節)。主に仕えるには全き心と喜びの魂を持てと、ダビデは我が子を諭す。主は一人ひとりのすべての心の内を見抜かれるのだから。
11月 1日 (日) 歴代上 29章	「このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう。…すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません」(14節)。ダビデは神殿建築のために金や銀を献げたが、それらはもと神のものを差し出したに過ぎないことを知っていた。今日、心の深いところからの感謝を献げることができますように。